様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０８３２

研究課題名（和文）9～10世紀前後の古代クルグズ族の南進に関する碑文・遺跡の現地調査と歴史学的研究

研究課題名（英文）Historical investigation and research on the campaingn to the Soutnern area of the ancient Qirghiz people during the period from the 9 to the 10th century AD.

研究代表者
大澤　孝（OSAWA, Takashi）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・教授

研究者番号：２０２６３３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本課題研究では，ハカス共和国およびモンゴル国の関係機関と学術協定を締結し，現地の研究者と共同でハカス共和国及びモンゴル国の古代遺跡や古代テュルク・ルーン文字銘文の調査を試みた．本調査を通して、従来発表された銘文の再検証をすることもでき，また偶然とはいえ，現在でも未解明のルーン文字を含む小銘文を見つけることができた。
　また本研究では，西暦９世紀から10世紀頃にかけて特徴的な文字を含む岩絵銘文がイェニセイ河沿岸のハカス方面からモンゴル高原西北部に広く分布していることが明らかになった．今後はここで得られた資料に基づき，古代クルグズ族の南進ルートやその歴史背景について明らかにしてゆきたいと考える．

研究成果の概要（英文）：In this project, I investigated and researched the sites and inscriptions on the Yenisei Khirghiz people in the Khakhassia and Mongolia with the local researchers under the international joint research agreement of Japan, Khakhassia and Mongolian countries. Through this investigation and research, I can say that some of them are to be written to express their own name and identity, and are related to his shamanistic belief in the spirit of the rock mountains and rivers.
 Analyzed the distribution of rock arts with runic inscriptions along the Yenisei River, I would like to clarify the campaign route of Yenisei Khirghiz and the historical background of their campaign against the Northwestern Mongolia in the 9-10th centuries AD.

研究分野：古代テュルク史

キーワード：イェニセイ河　クルグズ族　南シベリア　ハカス　トゥヴァ　モンゴリア　南進　古代テュルク・ルーン文字碑文

１．研究開始当初の背景

（1）本研究は 840 年に起こった東ウイグル可汗国の崩壊前後における「古代クルグズ族」の歴史動向に関する基盤史料の構築にある。当代の古代クルグズ族の動きに関しては，漢文史料を中心に白鳥庫吉、ペリオ、バルトリド、佐口透，長沢和俊，前田正名らが歴史地理学・民族学的に記述する一方、ウイグル史の立場からペリオ，羽田亨、安部健夫、山田信夫、ガバイン、マリャフキン、ハミルトン、森安孝夫などが漢文史料のほかに、可汗国崩壊後のウイグル族の西遷と周辺諸族との接触動向から、現地の碑文や現地語資料を駆使しつつ触れてきた。しかし現地碑文については，モンゴリアのスージー碑文を除いて，彼らの碑文そのものから当時のクルグズ族の南進を論じたものは僅少である。

（2）当時の状況を知る上での同時代史料として、唐の宰相・李徳裕撰＜會昌一品集＞に含まれた上奏文や勅令を挙げることができる。これは主に 842 年から数年間の南走派ウイグルと唐との政治外交関係を知るうえで欠かせぬ史料である。しかしこれを詳細に内容分析した岑仲勉や中島琢美（1987 年金沢大学大学院修了）や近年，同史料集の訳注を行なったドロンプなどの研究からは、何故クルグズ族が南進してウイグル可汗国を崩壊に追いやったのか、その進入経路や駐留期間やその後の行方、などの事象に関してはなお不鮮明な点も多く、更なる関係資料の蒐集と分析が必要である。

（3）また古代クルグズ族関係の碑銘資料は，ハカス共和国のミヌシンスク博物館やトゥヴァ共和国のキジル郷土博物館に収蔵され、私も機会をみては現地を訪れ、本テーマに関する字句を収集してきた。管見では，現在なおも上記両国のイェニセイ河中・上流の草原地帯の他に，アルタイ共和国ゴルノ・アルタイ地区や中国新疆北部，そして本調査の対象地となるモンゴル北西部からは本テーマに関わると推測される碑銘断片も報告されており、その数は近年徐々に増加しつつある。本研究はこうした研究環境の中で着想された。

２．研究の目的

（1）本研究では，1981 年に D.D.ワシリエフが出版した「イェニセイ碑文集成」の 120 個のイェニセイ碑文以外に、最近の発掘調査や表面調査の結果、ハカス共和国やトゥヴァ共和国の草原地帯や，イェニセイ碑文に関係の深い形式・内容を持つモンゴル国北西部のルーン文字銘文の現地調査と、最新の文献学的成果に基づいて、古代クルグズ族がその本拠としたイェニセイ河中流のアバカン地区から南方のサヤン山脈やタンヌー・オーラ山脈の盆地を経て、モンゴル北西のオブス県から、バヤン・ウルギー県からホブド県に至り、そこからバヤン・ホンゴル県北部からハンガイ山脈西方のサブハン県や東方のアルハンガイ県へと至る移動ルートとその移動の背景に関して、イェニセイ碑文タイプの分布状況と解読内容をもとにあとづけることを第一の目標においている。

（2）また古代クルグズ族のイェニセイ河中流域からモンゴル北西部および中央部への進出拡大の足跡は、同時に彼らが 9－12 世紀のどの時期にモンゴル北西部の各部族と如何なる関係をもってきたのか，という点と密接に関係する。例えば敦煌出土の古代チベット語文書（P.1283）に見られる 8 世紀末～9 世紀初頭の北アジア遊牧民の分布などとも比較しつつ、当時のクルグズ遊牧民がモンゴル高原に進出する際に、政治、軍事、文化面で接触を余儀なくされた東ウイグル可汗国をはじめとする諸勢力と具体的にいかなる関係にあったかを具体的に明らかにしたい、と考える。

（3）また本研究では、これまで不明であった古代テュルク・ルーン文字銘文がどのよう

な経路を経て、突厥から、古代ウイグル、そしてクルグズ族へ古代テュルク・ルーン文字を伝播させていったのか、という，これまで全く不明であったルーン文字の歴史的伝播経路や伝播時期の諸問題に対して具体的な検討材料を提供することをも目指している。

３．研究の方法

（1）本研究は、３年間の計画で現地の研究機関や研究者と共同調査を行いつつ、実施する。本調査対象は、なおその具体像が不明なイェニセイ河中流域のハカス共和国内やモンゴル国北西部の草原地帯で新たに見つかったイェニセイ碑文タイプの墓碑銘や岸壁銘文であり，これらを現地の学術機関や現地研究者と共同調査し、新たに拓本を取ったり，写真撮影をしたりして収集整理する。

（2）また、こうした新たに獲得したイェニセイ碑文タイプの建造地にかかわる分布図を作成して，これまで不明とされてきた 9―12 世紀における古代クルグズ族のモンゴル方面への進出経路や駐留状況を明らかにすることで、9―12 世紀当時のクルグズ族の歴史的展開過程を明らかにしてゆきたいと考えている。

４．研究成果

（1）本研究ではハカス共和国の言語歴史文学研究所及びモンゴル科学アカデミー考古学研究所との学術協定に基づき，現地の考古学研究員と実施調査を実施することで、これまで不明であったクルグズ族の南下に関する手がかりを得ることができたと考える。

そのひとつが、2008 年にモンゴル国北西部のホブド県マンハン郡の洞窟墓から出土した遊牧民の遺骨及び遺物である。特に注目されるべきは弦楽器の表面に刻まれた古代テュルク・ルーン文字である。これまで本銘文ンの読みは研究者により様々な読みが提唱されてきているものの，保存状況が悪く摩滅もあり，極めて困難とされてきた。私自身はこの墓の被葬者がクルグズ国人の戦士であるという説を、2012 年夏のモンゴル国やハカス共和国での国際学会で発表していたが、2014 年に現物調査を実施し、この銘文中に「クルグズ国」と読める字句が確実であることを確信した。このことは本研究課題に直結するもので，本墓の出現は、西暦 9 から 10 世紀頃にクルグズ族がモンゴル西北部に確かに進入していたことを窺わせるものといえ，その流入経路や当時の歴史状況を考える上で、大きな意義をもつ。この調査結果についても京都大学の東洋史大会で発表を行っている。

（2）またハカス共和国では主にイェニセイ河中流域の岩絵を伴う古代ルーン文字銘文を現地の研究者と調査した結果、短いものであるとはいえ、新たな銘文を見つけている。但しその銘文では転写方法がなお確立されていない異種の文字が含まれ，その判読は将来の課題である。ただこうした判読不明な異種の文字を含む銘文がイェニセイ河上流のトゥヴァからモンゴル北西のアルタイ方面にまで散見される状況は，本方面にイェニセイ・クルグズ族が進出した足跡を窺わせるものと認識できる。今後はこうした異種の文字を含む銘文の所在を丹念におうことでクルグズ族の南進経路やその後の拡大を推し量る根本資料となることは疑いを入れないであろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　5 件）

1．大澤　孝「モンゴリアと南シベリアの岩絵の現状と課題」嶋田義仁・今村薫編『岩絵文化と人類文明の形成―アフリカ，北欧，中央アジア，新疆，モンゴル』（アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明叢書 12），中部大学中部高等学校研究所、愛知、2016、pp. 115-175 (査読あり).

2. 大澤　孝「南シベリア，サヤン・アルタイ地方の岩絵銘文の調査覚え書き－古代テ

ュルク時代の岩絵年代をめぐる問題を中心に－」『史朋』48、2015、pp.1-34 (査読あり).
3. Takashi OSAWA, The problem and cultural background of Runic Scripts of Old Turkic Epitaphs, I. Nevskaya, M. Erdal (eds.) *Interpreting the Turkic Runiform Sources and the Position of the Altai Corpus*, pp. 131-149, 2015, Berlin,（査読あり）.
4. Takashi OSAWA, Preliminary reading of the Old Turkic Runic inscription on the Harp typed musical instrument from the Northwestern Mongolia, *Naychinoe Obozrenie, Sayano-Altaya*, 7, pp. 19-27, 2014.（査読あり）
5. Takashi Ōsawa, "Problems on the Old Turkic Terms 他人水 *Ta-Ren-Shui*, 勃登凝梨 *Bo-deng-ning-li* as the sources of the cult-cultural background among the Orkhon-Yenisei peoples", Bülent Gül(ed.) *Bengü Beläk, Ahmet Bican Ercilasun Armağan*, Ankara, pp.385-404, 2013,（査読あり）.

〔学会発表〕（計　6 件）
1. 大澤　孝「2014 年度　モンゴル高原における古代～中世遊牧民の遺跡・碑文調査報告－西部モンゴル調査から－」（国際シンポジウム報告集　モンゴル考古学の現在―国際プロジェクトと歴史文化遺跡・碑文の調査研究、大阪大学中之島センター会議室、2014 年 12 月 20 日）大澤孝（編）『』大阪大学大学院言語文化研究科、箕面、2014、pp. 55-73.
2. Takashi OSAWA, New Runic Sources of the Tepsei Mountain and the Poltakov Museum, Narodi i Kul'turi Yuzhnoj Sibiri i Sopredel'nikh Territorij, Materiali Mezhdunarodnoj Nauchnoj Konferetsii, posvyashichyonoj 70-retiyu Khakasskogo Nauchno-Issledovatel'skogo Instituta Yazika, Literaturi i istorii (24-26 Centyabrya 2014 goda), 2014, pp.54-60.
3. 大澤　孝「モンゴル高原ホブド県の洞窟墓出土の楽器銘文からみたイェニセイ・クルグズ情勢」2014 年度東洋史研究会大会、2014 年 11 月 3 日、京都大学文学部新館第二講義室.
4. Takashi Ōsawa, Problems on terms and Terminolologies of Cultural and Ritual worshipping of the sacred Mountains and Rivers among the ancient Turkic nomad peoples of the Orkhon and Yenisei regions. Tyurkskaya Runika: Yazik, Istor*ya, Kul'tura, k-120 letiyu deshifrovki-orkhono-yeniseickii pis'menosti Materiali Mezhdunarodnoi Naychinoi konferentsii, 1. Chast' pp. 47-54. 2013, Abakan (Russia)*.
5. Takashi OSAWA, New discovered runic inscription from the cave of the Tepsei Mountain, Narodi i Kul'turi Yuzhnoj Sibiri i Sopredel'nikh Territorij, Materiali Mezhdunarodnoj Nauchnoj Konferetsii, posvyashichyonoj 70-retiyu Khakasskogo Nauchno-Issledovatel'skogo Instituta Yazika, Literaturi i istorii (25 Centyabrya 2014 goda), 2014.Abakan (Russia).
6. Takashi OSAWA, Retrospect and Prospect of the International Joint expedition on the sites and inscriptions of the ancient Turkic period between Mongol and Japan , The first International Conference on Inscription Studies, organized by the International Association for Mongol Studies, on the 11th August 2014.with abstract, Ulaanbaatar (Mongol).

〔図書〕（計　1 件）
大澤　孝（編）『国際シンポジウム報告集　モンゴル考古学の現在―国際プロジェクトと歴史文化遺跡・碑文の調査研究』大阪大学大学院言語文化研究科、箕面キャンパス 2014.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大澤　孝　（OSAWA Takashi）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：20163345

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：